

もり さわ ま なお
森 沢 真 直

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 205 号
学位授与年月日	平成18年1月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 人間科学専攻
学位論文題目	新古今時代和歌の研究
論文審査委員	(主査) 教授 仁平道明 教授 佐藤伸宏 教授 佐藤弘夫 助教授 佐倉由泰

論文内容の要旨

一 研究の対象と目的

本論文は、『新古今時代和歌の研究』と題し、中世和歌文芸、なかんずく新古今時代の和歌について究明を目指したものである。中世和歌という場合、論者によって多少の相違はあるものの、その時代的上限については大体千載集時代とし、下限については室町期末あたりとするのが一般的な一つの設定であり、本論文でもそれに従う。そしてその中でも特に千載和歌集から新古今和歌集にかけての時代の和歌を研究の対象とした。

この時代は、政治史的に言えば平安時代末期から鎌倉時代初頭に相当する。文芸史的もしくは和歌史的に見れば、古今和歌集を劈頭とする三代集時代から後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集の時代を経て、古典的な和歌文化が浸透し多くの蓄積がなされたその後であり、大きな変動を見せた時期とすることができる。平安朝の政治的そして文化的秩序が変質し、衰退し、次の時代に向かって変貌を始めた時期でもある。

その中において、古典的な和歌や物語の世界を承継し消化しつつ、新たな和歌の技巧と風体を飛躍的に現出せしめた特筆すべき時期が、この千載和歌集から新古今和歌集にかけての時代であり、とりわけその集大成としての新古今和歌集にその顕著な表れが存するのである。この時期は、西行・藤原俊成・寂蓮・慈円・藤原定家・藤原家隆・藤原良経・後鳥羽院などの秀逸な歌人が一挙に出現し、妍を競った稀有な歌壇状況でも知られるところである。

そこで本論文では、多彩・多様な歌風と技法が花開いた新古今和歌集および新古今時代の和歌を最も

枢要な研究対象とし、それに至る前史的な位置付けながら千載和歌集および千載集時代も考察の範囲に加えることとした。

二 本論文における研究の方法と特質

研究の方法には様々なものがある。書誌的な研究も基盤として必要であるし、歌壇史的な研究も謂わばその後の研究の土台となるものである。その他、概括的・類型的な歌風研究、注釈的な研究、特定有名歌人の個人研究なども、これまでに相当程度なされて来たところである。近來の研究動向としては、これら過去の蓄積を踏まえながら、歌の技法や表現方法への分析を深めるなど、多様性を持ちつつ深化して行っている状況である。本論文では、それらの研究史や動向に注意を払いつつ、論を進めた。

従来の研究は、歌を分析する場合において、語釈や背景となる関連文献の探索を通して、どちらかと言えば概括的・直感的・慣習的な方法によって解釈を定めるという行き方であったと考えられる。

本論文では、そのような漠然たる方法論からさらに一步を進め、自覚的・論理的・体系的な方法を援用しつつ、歌の意味・構造・解釈などに対し、より深く鋭く切り込みたいと考えた。すなわち、一つにはまとまりのない慣習的方法とは異なる体系性・理論性を指向すること、二つ目には歌の分析・解明を論理的にまた明快かつ詳細に、適切な方法で、推し進めようとする、この二点と言える。

またそれに加えて、従来のやや散漫で輪郭の曖昧な方法に対し、分析から結論に至るプロセスや、前提条件と結論との関係や、主張の範囲と限界などを、できるだけ明確に提示したいという意識を持って筆を進めた。それは研究を閉ざすためのものではなく、むしろ批判や、新資料による変更、別の観点からの考え直しなどを容易ならしめ、それらに対して開かれた研究内容とするためのものである。

三 全体の構成と各編・各章の概要

序章

本論文における研究の対象と目的、概括的な研究史的背景、そして本論文における研究の方法と特質、全体の構成と各章の概要について述べた。

第一部 和歌研究の一般理論とその適用

和歌研究における理論的・方法論的問題を考察し、その実際の・具体的適用を行った部分である。

第一章 言説の一般理論と和歌——物語論に触れながら——

前半部分では、シュタンツェル、ジュネット等の物語論を概観し、その基本的体系あるいは構図について検討し、特定ジャンルとしての和歌文学などを考察する場合をも考慮し、文芸的言説の一般的図系を新たに設定した。発語—摂語の関係を言説の内部と外部とで厳密に区別し、さらに下位言説と上位言説の関係に注目し、言説の連鎖的秩序を分析することで、種々の問題を解決し、さらには言説から得られる意味や情報を捉える基盤を得ることができる。いわゆる内包された作者・読者という概念は肯定できない。後半では、実際に歌を解釈するための三つの観点、すなわち発語者の位置付けと発語状況への想定、発語者やいわゆる作者の姿への想像や判断、当該言説と先行言説との連関（コンテクスト（文脈）の連関の仕方）という三つの観点を設定し、それに基付いて新古今時代の歌を中心として具体的に論じた。

第二章 文芸的言説における視点・認識への基礎的考察

第一章が主に言説の全体の図系、発語者、動作の主体の問題を中心に扱ったのに対して、この章では、視点・焦点化・認識の問題を集中的に論じた。ここでも物語論におけるジュネット、バルらの視点、焦点化への議論を踏まえつつ、さらには自分の第一章の立場に基付き、従来説の問題点を検討し、理論をさらに前進させることを目指した。まず視覚・認識の対象の性質（内的・外的）の他、言説内での視点への言及の有無、視点・視線の連鎖、上位言説から下位言説への言及の如何等によって、基本的な類型を設定できる。いわゆる内的視点・外的視点という概念は肯定できない。この他、視線の無限の往復・循環、言及の侵犯などの問題、上位言説と下位言説との相互関係から生じる種々の問題などを考察した。

第三章 新古今時代和歌における視点と発語状況の問題

上記の第一章・第二章の観点に立ち、視点や発語状況の問題を、新古今時代の和歌において具体的・個別的に検討した。特に検討の出発点として吉岡曠氏の論文「作者のいる風景」を組上に載せた。吉岡氏は、西行の歌「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮」について「風景を眺める作者の視点と、その作者を背後から眺めるもう一つの視点と、二重の視点が提供され、二重の視点から眺められる。」と述べる。また定家の歌「みわたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」については、上句は「直接には風景の描写であり」「作者」は苫屋の中にいてそこから浦の景色を見渡しているものとし、「作者が風景を対象意識をもって眺めているのはむしろ上句においてであり、下句は作者の自己意識の世界になる。」「上句から下句への間を境にして、(中略)風景と風景を眺めている自分と、要するに自分のいる世界全体を秋の夕暮の中に観ずる、想念の世界が展開する。」と述べる。この見方に対し、言説における発語者や視点の位置や構成を分析して行くと、吉岡氏の主張は多分に曖昧かつ不適切であり、ほとんど成り立たないものであることが分かる。しかしながら、多くの単純な叙景歌では発語者や視点の構成もシンプルであるのに対し、俊成の歌「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」なども含め、新古今時代の秀歌には、奥行きや複雑さを感じさせるものが見られるのも確かである。

第二部 新古今時代和歌の様相

第一部の理論的設定を前提としつつ、新古今時代の優れた歌を取り上げて、その問題点を具体的かつ詳細に論じたものである。

第一章 俊成「夕されば」と伊勢物語——言説の位相とコンテクスト連関——

俊成の「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」について考察した。この歌では、「身にしみて」の主語（主体）は何か（誰か）ということ、背景として指摘されている伊勢物語一二三段および古今集の同種の歌との関わりをいかに捉えるかということ、この二つの論点を中心に研究史において論じられてきた。そこで第一部の理論的設定において得られた図系を利用しつつ、どのような整理ができ、またいかなる展望がありうるのかということを示した。発語者が登場人物として情景中に姿を現さず、別のある人物が登場しているものとして読むとき、その登場人物として伊勢物語の男あるいは在原業平を設定する想像が働く。また発語者が登場人物として情景中に姿を現しているものとして読むときは、それを俊成のイメージで捉えることもできるが、ここでも伊勢物語の男あるいは在原業平の発語として鑑賞することが可能である。それによって読者の受ける印象や情調も変化する。また語史・表現史を検討すると、「夕されば」「野辺」「秋風」「身にしむ」「鶉」「深草の里」「秋の夕暮」「かなし」「さびし」などの語句は和歌史において表現の蓄積と熟成の歴史を持っており、俊成「夕されば野辺の秋風」

歌もそれを背景として成立し、余韻や情調を喚起することになる。

第二章 西行「鳴立つ沢」「難波の春」歌考——嘉言・能因を源流とする世界——

西行の二つの歌「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮」「津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり」について考察した。初めの「鳴立つ沢の秋の夕暮」歌では、「心なき身にも」そしてそれに連動して「あはれ」の部分に解釈の対立が見られる。「心なき」については、第一系統「出家して煩惱を離れ、心を動かさなくなった僧侶の身であっても」という意味、また「あはれ」の内容に連動して第二系統の広義「しみじみした情感を抱いたりものあはれを感じたりすることのない自分ですが」あるいは狭義「情趣・興趣・風情などを解さない自分ですが」とする広狭二つの文脈、計三通りの解釈が可能である。そこで「心なき」あるいは「あはれ」の用例を、和歌史および西行自身の歌から探り、能因の後拾遺集所収歌「心あらむ人に見せばや津の国の難波の浦の春のけしきを」などとの照応関係を考えた。その結果、特定の先行歌との照応関係の深浅によって、前述の第二系統の狭義、広義、およびその中間の三段階の解釈が確認できる。第一系統の解釈は排除される。また「津の国の難波の春は」歌では、難波の春をめぐる能因や嘉言などの歌人たちの交流の世界が背景をなしている。それら先行する世界との対応関係を考慮に入れることによって、狭義、広義、およびその中間の三段階の解釈を設定することができる。

第三章 定家歌「みわたせば花も紅葉も」論——研究史の検証と解釈の秩序——

定家の「みわたせば花も紅葉もなかりけり浦の苦屋の秋の夕暮」の歌を論じた。この歌は、古来、解釈上の議論が多く、学説が対立して時に激しい論争が戦わされたことで知られる。(特に齋藤茂吉と谷鼎の激烈かつ長期に渡る論争は有名である。)その議論は落着を見ていないばかりか、論争の原因すら確認されていないと言ってよい。そこで、主要な学説や論争を整理し、どこに問題があるのか、どのような解決法があるのかということ、詳細かつ丹念に述べた。重要な論点は、論点①が「なかりけり」の単純説と比較説、論点②が余韻・情調に関する「さびしい・わびしい・幽玄閑寂」説と「をかし・おもしろい・趣がある」説、そして論点③が「花・紅葉」についての実景・実物説と代表・象徴・観念説という三点である。紛争の主たる原因は、「みわたせば〜けり」の発見的詠嘆の型が「花・紅葉」という対象に用いられて、季節の齟齬をきたすことにある。そこで、このような論点についての分析を経ながら、様々な条件によっていかに複雑かつ多様な解釈の秩序ができ上がって行くかという筋道を辿り、従来の解釈図式を大幅に改め、この歌のもつ解釈可能な範囲とその条件を示そうとした。

まず論点③については、「実物」＋「限定」説が妥当であり、「観念」説もしくは「代表・象徴」説はいずれも不適當である。そもそも谷鼎の設定したこの「花・紅葉」の語義の性質という論点が見当違いで不毛なものである。これは、「花も紅葉も」の係助詞「も」を「単純並列」と取るか「並列＋例示・類推・暗示」と取るかという、新たな論点として組み直されるべきである。論点②については、「さびしい・わびしい」説が基本であり、その趣を含む「をかし・おもしろい・趣がある」説も考えられるが、これは排他的な二者択一の対立ではなく、連続的な広狭二様のあり方である。論点①については、単純説が基本であり、狭い意味の比較説は成り立たない。ただし、比較説の持つニュアンスを余韻として持つ単純説は鑑賞上はありうるし、またそれとは反対の方向の余韻を持つ理解も同様に成立しないとは言えない。解釈に辿り着くために必要な論点は、以上の三つに留まらない。「花も紅葉も」に関して、季節の推移を表すか、折々の季節のものを表すかという論点もその一つである。これら一切の論点を検討した結果、たった一つの矛盾なき明快な解釈は成立し得ないことが判明するとともに、一定の範囲内で、

何らかの条件の下、複数の解釈が成立する。そこには語意、余韻、先行歌との関連など、種々の条件によって、複雑な解釈の分岐が見られるのである。

第四章 定家歌「みわたせば花も紅葉も」の背景—「ながむれば」と「秋の夕暮」に抛りつつ—

第三章では、定家「みわたせば花も紅葉も」歌において、語句の表層的整合性に拘泥する限り矛盾や破綻のない解釈を得ることは困難であることが判明した。そこでこの章では、前章の勘考を受けつつ、今度は方向を変え、和歌史的背景を探求しながら、当該歌がその特定の背景を受け継ぎ表しているともみなすことによって整合性のある解釈に到達できることを論じた。具体的には、「みわたせば」型の歌と「ながむれば」型の歌とが類似し交錯していること、「秋の夕暮」を詠った歌には一定の傾向や情調があることに注目した。和歌史的に見ると、「ながむれば」型の歌は、沈思の意味が薄れて眺望の意味に重点を移して行く。そして「ながむれば～けり」という型は、「みわたせば～けり」という型と同様に、発見的詠嘆のパターンとして近接し類似する。また「秋の夕暮」の「かなし」く「さびし」く「あはれ」ぶかい風情を眺める歌が時代を追って熟成して行く。これらの考察を踏まえて、定家の当該歌を、〈発語者がある〈秋の夕〉の情景を「みわたす」ことによってある状況を見出し、そこに「かなし」く「さびし」く「あはれ」ぶかい風情を看取・発見した〉という構造を持つ歌として捉えることが可能となる。前章のように、解釈が分裂してしかも整合性のあるものには到達できないとする立場と、本章のように、整合性のある解釈を求める立場とは、読みの前提条件を異にすることによっていずれも可能となり成立するのである。

第五章 定家歌「春の夜の夢の浮橋」考— 解釈の成立そして宇治十帖への連関—

定家の「春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるる横雲の空」の歌について勘考した。この歌は、語句の意味、語句同士のつながりや全体の構造、その表す具体的情景などが曖昧かつ不鮮明で、とりとめない風体と言われ、解釈や背景をめぐって議論が絶えない。そこで歌の構造を分析し、視点と主体の問題を考察し、背景となる眺雲沈思のモチーフとの関連を論じ、多様な意味を生み続ける複雑な歌の仕組みそのものを解明しようとした。そして源氏物語・宇治十帖とさまざまな微妙な照応関係を持っていることを述べた。

歌の構造の問題としては、「春の夜の夢の浮橋」における語句の掛り受け、「夢の浮橋」の意味として「浮橋」と「夢」のいずれかに力点が置かれること、語史的な背景として「橋—絶え」「夢—絶え」「雲—絶え」の三つの文脈があることに注意が必要である。また上の句と下の句との関係においても、「とだえして」が「橋」「夢」「雲」の三つとそれぞれ結び付き、切れ目にもなり結節点にもなっている。これらを勘案すると、幾筋にも分岐して行く複雑この上ない意味の流れがあり、しかもそれらがからまり合つて茫漠たる風情を生み出している。また視点あるいは動作の主体についても、登場人物の視点、客観的な第三者の視点、そして歌の中の各要素における視点の構成の仕方などを考慮すると、決定されない落ち着かなさを免れることはできない。通常言われる解釈は、その中で強い一番単純鮮明なものを取り出したものに過ぎない。この歌は眺雲沈思のモチーフを背景に置いて解釈されることが多いが、これは、この歌の情景や文脈を具体的かつ明瞭なものとするため、そして解釈を成立させるために、先行する当該モチーフ歌、文選・高唐賦、源氏物語などと呼び込み、その型にはめ込んだものとみなすことができる。そして宇治十帖との関連については、特定の場面と明瞭かつ直接的に結び付くのではなく、宇治十帖中にちりばめられた様々な印象的な語句、すなわち「起き臥し」「ながめ暮らす」「心のどか」「橋」「峰」「夢」「雲」などの語句との間に連想が働くことによって、薫をめぐる物語が一定の筋道を

持って読者の脳裏に磅薄と浮かび上がり、おぼろけにイメージが揺曳するようになっている。歌の意味、構造、風情、背景など、いずれの点においても絶妙としか言いようのない作りを持っていることが分かる。

第三部 新古今時代和歌の基底と周辺

新古今和歌集の基底となる事象や周辺的な問題に関する論考を収めた。

第一章 源氏物語から中世和歌へ——真木柱巻と定家を中心に——

源氏物語の後代、特に中世和歌への影響関係について述べた。源氏物語は後の和歌、とりわけ新古今時代の新風歌人たちに発送や表現の契機を与えた有力な源泉であり、俊成の六百番歌合判詞にもうかがわれる。真木柱巻においても、定家の歌に本説取りとなって影響を与えた歌があり、定家の源氏物語撰取の跡を看取することができる。

第二章 『三体和歌』断簡について

東北大学大学院教授仁平道明氏所蔵の三体和歌断簡について勘考した。当該断簡は、三体和歌のうち長明の詠んだ六首中の四首を写したものであり、傍注がある。うち一首については、三体和歌と無名抄との間で異同があるが、本断簡では三体和歌に所収のものと同じである。筆跡は極めて独特かつ特徴的で定家の筆跡と酷似しており、他の三体和歌出詠歌人たちのものとも全く異なり、おそらく定家筆であろうと考えられる。定家は三体和歌の講師を務めており、出詠歌を書き留めて、それを後に歌の選出などの際に用いて勘考を加えたものと推測される。傍注は、他の三体和歌本文と対校することにより、歌の内容や表現を考える上で参考となる材料を提供してくれるもので、貴重である。第一首「くもさそふ天つ春風」歌では「さそふ」に「まがふ」と注されているが、他の本文には「さそふ」「まよふ」の形が見えており、本断簡により「雲まがふ」の形を考慮に入れる必要が出てくる。また第二首「住なれし卯ノ花月夜」歌では、第三句が「時ふけて」とあるが、他本では「時すぎて」とするものも多い。傍注で「その卯に月すみなれしなり」とあるが、他本の注釈では「ほととぎすが卯の花にすみなれた」と解するものが多く、解釈上の重要論点となる。以上のように、本断簡は、三体和歌・長明詠について、本文校訂や解釈上の問題について有益な資料となり、また問題提起するものでもある。

第三章 高校国語古典教育における和歌文学

高校国語古典教育において和歌文学を教授・指導する場合、どのようなことに留意すべきかを論じた。実際の指導経験を踏まえ、またいくつかの教科書の教材も精査し、内容・表現・歴史的背景等についての理解を深めさせる方法を考えた。古典は生徒にとって目慣れないもので多少の取っ付きにくさはあるが、時代背景を異にする世界を知り、現在の自分の身の周りから遠い世界を探求し、その面白さ、現在との共通性やつながりなどを発見する機会となるという意味において、有益であると考えられる。高校の古典学習の教材となる作品は、時代で言えば平安・鎌倉、ジャンルで言えば物語・日記・随筆等が主流であろう。しかし和歌文学は、形式の面白さ、少ない語句で多くの意味や情調を表す表現上の奥深さ、時代や作者により特徴や性格を異にする作品が様々に現れる姿をコンパクトに見ることができる点などにおいて、他のジャンルにはないメリットがある。実際の教科書に採択された教材については、万葉集・古今和歌集・新古今和歌集のいわゆる三大歌集を素材とするものが大半である。歌集の性格というものは、選集成立時の歌風だけから成るものではなく、長い時代の変遷を反映していたり、選者の何らかの

選択基準によって形成されたりしているということについての注意が必要である。三大歌集の性格・特徴について公式的に言われることは、それ自体は誤りではないが、多分に概括的で一面的なものであるということも知っておく必要がある。実際の教科書の教材として、百人一首に関する白州正子の評釈を掲載したものがあり、このような鑑賞と併せて学ぶのも一つの効果的な手段であると思われるが、評者である白州の見解は、研究史的に見ればかなり古い時代の通説によったものや、内容のはっきりしない印象批評などもあり、そのまま了承するには問題のあるものなので、そういう点でも教師の側にある程度の配慮が求められる。教師用指導資料においては、有益な指摘の他、高校生にとってはやや難しいと思われる知識も掲載されており、実際の授業では若干の注意が払われることが望ましい。

論文審査結果の要旨

本論文は、古典的な和歌や物語の世界を承継・消化しつつ新たな技巧と風体を飛躍的に現出せしめた千載和歌集から新古今和歌集にかけての時代—その前史を含む新古今時代の和歌の解釈のために、語釈・背景指摘・概括的解釈を旨とする従来の評釈的研究とは異なる新たな方法と解釈の理論を探求・構築し、それを適用して、新古今時代の技巧によって詠まれた代表的な和歌の解釈について考察しようとしたものである。

全体は、「序章」「第一部 和歌研究の一般理論とその適用」「第二部 新古今時代和歌の様相」「第三部 新古今時代和歌の基底と周辺」から成る。

「序章」においては、本論文における研究の対象と目的、概括的な研究史的背景、そして本論文における研究の方法と特質等について述べる。まず、本論文において検討の対象とする千載和歌集から新古今和歌集にかけての時代—新古今時代を、古典的な和歌や物語の世界を承継し消化しつつ新たな和歌の技巧と風体を飛躍的に現出せしめた時代として概括し、そのような背景を有する和歌の解釈のために、語釈・背景指摘・概括的解釈を旨とする従来の評釈的研究とは異なる方法が要請されることを指摘する。

「第一部 和歌研究の一般理論とその適用」は、「第一章 言説の一般理論と和歌—物語論に触れながら—」「第二章 文芸的言説における視点・認識への基礎的考察」「第三章 新古今時代和歌における視点と発語状況の問題」の三章から成る。

「第一章 言説の一般理論と和歌—物語論に触れながら—」では、欧米の批評理論、シュタンツェル、ジュネット等の物語論等を概観し、その基本的体系あるいは構図について検討し、またブース、チャットマン等の理論の問題点を批判的に指摘しつつ、特定ジャンルとしての和歌文学などを考察する場合をも考慮して、文芸的言説の一般的図系を新たに設定する。発語—撰語の関係を言説の内部と外部とで厳密に区別し、さらに下位言説と上位言説の関係に注目し、言説の連鎖的秩序を分析することで、種々の問題を解決し、さらには言説から得られる意味や情報を捉える基盤を得ることができるとする論者の主張は、傾聴すべき点が少なくない。秀能・実定・西行等の歌を例として、発語者の位置付けと発語状況への想定、発語者の姿への想像・判断、当該言説と先行言説の連関という三つの観点から、和歌を分析するための枠組みを検討し、解釈を可能にする条件と枠組みを明らかにする提言も貴重である。「第二章 文芸的言説における視点・認識への基礎的考察」では、前章が主に言説の全体の図系、発語者、動作の主体の問題を中心に扱ったのに対して、従来物語や小説の分野で論じられている視点・焦点化・認識の問題を、和歌言説分析のために援用する可能性とその問題点を論じ、従来のモデルにかえて新しい枠組みを設定する。すなわち、物語論におけるジュネット、バルらの視点、焦点化への議論を踏まえつ

つ、それらの理論をさらに前進させるための思考の枠組みが設定される。論者は、まず従来の物語論において用いられている内的視点・外的視点という概念を、どちらかに決めがたい場合のあることを指摘してその有効性を批判する。そして、視覚・認識の対象の性質（内的・外的）の他、言説内での視点への言及の有無、視点・視線の連鎖、上位言説から下位言説への言及の如何等によって、基本的な四つの類型を考え、「登場人物のものとして言及されていない視点（言説外の視点）」「登場人物のものとして言及されている視点（言説内の視点）」「物的・外面的対象」「心理的・内面的対象」を【視覚／認識における四つの基礎範疇】とし、その四つの基礎範疇を組み合わせた文の四つの類型を【視覚／認識における四つの基礎類型】とし、そこから発語者の姿や発語状況を整理し、【視覚／認識に対する仮定と推測】のあり方を考察する。従来の内的視点・外的視点という大雑把な区分によらず、視点・焦点化・認識の関係についての類型を構築した論者の主張は、屏風歌研究における「絵の中の人物の立場で詠む」という把握による和歌の視点の理解を超えた、新しい展望をひらく可能性を有するものとして評価されるべきだろう。「第三章 新古今時代和歌における視点と発語状況の問題」では、和歌言説ひいては言説一般を論じるための基礎的枠組みについての第一章・第二章の観点をふまえて、視点や発語状況の問題が、新古今時代の和歌において具体的・個別的に検討される。検討の出発点として吉岡曠の論文「作者のいる風景」を俎上に載せ、西行の歌「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮」について「風景を眺める作者の視点と、その作者を背後から眺めるもう一つの視点と、二重の視点が提供され、二重の視点から眺められる」、また定家の歌「みわたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」については、上句は「直接には風景の描写であり」「作者」は苫屋の中においてそこから浦の景色を見渡しているものとし、「作者が風景を対象意識をもって眺めているのはむしろ上句においてであり、下句は作者の自己意識の世界になる」「上句から下句への間を境にして、(中略)風景と風景を眺めている自分と、要するに自分のいる世界全体を秋の夕暮の中に観ずる、想念の世界が展開する」とする吉岡の見方に対し、言説における発語者や視点の位置や構成を分析して行くと、吉岡の主張は多分に曖昧かつ不適切であり、ほとんど成り立たないものであるとされる。そのような吉岡説に対して視点の系列構成が第一次の視点だけで終わるかそれとも第二次の視点をも含むか、叙景的なものかそれとも心情の叙述をも含むかという点から分析を加えるべきであるとする論者の主張の妥当性は疑いを容れないものと思われる。

第一部の理論的設定を前提としつつ新古今時代の優れた歌を取り上げてその問題点を具体的かつ詳細に論じた「第二部 新古今時代和歌の様相」は、「第一章 俊成「夕されば」と伊勢物語一言説の位相とコンテクスト連関」「第二章 西行「鳴立つ沢」「難波の春」歌考—嘉言・能因を源流とする世界—」「第三章 定家歌「みわたせば花も紅葉も」論—研究史の検証と解釈の秩序—」「第四章 定家歌「みわたせば花も紅葉も」の背景—「ながむれば」と「秋の夕暮」に抛りつつ—」「第五章 定家歌「春の夜の夢の浮橋」考—解釈の成立そして宇治十帖へ—」の五章から成る。

「第一章 俊成「夕されば」と伊勢物語一言説の位相とコンテクスト連関」は、俊成の「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」について考察する。「身にしみて」の主語（主体）は何か（誰か）ということ、背景として指摘されている伊勢物語一二三段および古今集の同種の歌との関わりをいかに捉えるかということ、この二つの論点を中心に研究史において論じられてきたこの歌について、第一部の理論的設定において得られた図系を利用しつつ、どのような整理ができ、またいかなる展望がありうるのかということが述べられる。すなわち、発語者が登場人物として情景中に姿を現さず、別の人物が登場しているものとして読むとき、その登場人物として伊勢物語の男あるいは在原業平を設定する想像が働き、また発語者が登場人物として情景中に姿を現しているものとして読むときは、それを俊成のイメージで捉えることもできるが、そこでも伊勢物語の男あるいは在原業平の発語として鑑賞す

ることが可能であり、それによって読者の受ける印象や情調も変化すると論者は指摘する。第一章・第二章において考察した分析のための枠組みによって、解釈の分かれが生ずる回路が明らかにされるだけでなく、鑑賞の機構をも探求した考察の結果は、和歌の解釈と鑑賞との関係について示唆するところ少なくない成果として高く評価されるべきものである。「第二章 西行「鳴立つ沢」「難波の春」歌考—嘉言・能因を源流とする世界—」は、西行の二つの歌「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮」「津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり」について考察する。「鳴立つ沢の秋の夕暮」歌では、「心なき身にも」そしてそれに連動して「あはれ」の部分に解釈の対立が見られること、「心なき」については、第一系統「出家して煩惱を離れ、心を動かさなくなった僧侶の身であっても」という意味、また「あはれ」の内容に連動して第二系統の広義「しみじみした情感を抱いたりものあはれを感じたりすることのない自分ですが」あるいは狭義「情趣・興趣・風情などを解さない自分ですが」とする広狭二つの文脈、計三通りの解釈が可能であることが指摘される。論者は、「心なき」あるいは「あはれ」の用例を、和歌史および西行自身の歌から探り、能因の後拾遺集所収歌「心あらむ人に見せばや津の国の難波の浦の春のけしきを」などとの照応関係を考え、その結果、特定の先行歌との照応関係の深浅によって、前述の第二系統の狭義、広義、およびその中間の三段階の解釈が確認でき、第一系統の解釈は排除されること、また「津の国の難波の春は」歌では、難波の春をめぐる能因や嘉言などの歌人たちの交流の世界が背景をなし、それら先行する世界との対応関係を考慮に入れることによって、狭義、広義、およびその中間の三段階の解釈を設定しうることが明らかにされる。「第三章 定家歌「みわたせば花も紅葉も」論—研究史の検証と解釈の秩序—」では、定家の「みわたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」の歌を論じる。解釈上の議論が多く、学説が対立して時に激しい論争が戦わされたことで知られるこの歌について、論者は、主要な学説や論争を整理し、問題点、解決法について考察する。重要な論点は、論点①が「なかりけり」の単純説と比較説、論点②が余韻・情調に関する「さびしい・わびしい・幽玄閑寂」説と「をかし・おもしろい・趣がある」説、そして論点③が「花・紅葉」についての実景・実物説と代表・象徴・観念説という三点であること、紛争の主たる原因は、「みわたせば〜けり」の発見的詠嘆の型が「花・紅葉」という対象に用いられて、季節の齟齬をきたすことにあること、そこで、このような論点についての分析を経ながら、様々な条件によっていかに複雑かつ多様な解釈の秩序ができ上がって行くかという筋道を辿り、従来の解釈図式を大幅に改め、この歌のもつ解釈可能な範囲とその条件が示されることが明らかにされる。そして、これらの論点を検討した結果、唯一の矛盾なき明快な解釈は成立し得ないこと、一定の範囲内で、何らかの条件の下、複数の解釈が成立すること、そこには語意、余韻、先行歌との関連など、種々の条件によって、複雑な解釈の分岐が見られることが指摘される。言語芸術表現としての和歌の解釈について、安易に多義性に収束させることなく、意味の分岐する回路を明らかにした論の成果は、示唆するところ大なるものがある。「第四章 定家歌「みわたせば花も紅葉も」の背景—「ながむれば」と「秋の夕暮」に抛りつつ—」は、定家「みわたせば花も紅葉も」歌において、語句の表層的整合性に拘泥する限り矛盾や破綻のない解釈を得ることは困難であることを明らかにした前章の勘考を受け、和歌史的背景を探求しながら、当該歌がその特定の背景を受け継ぎ表しているとみなすことによって整合性のある解釈に到達できることを論じる。すなわち、「みわたせば」型の歌と「ながむれば」型の歌とが類似し交錯していること、「秋の夕暮」を詠った歌には一定の傾向や情調があることに注目し、和歌史的に見ると、「ながむれば」型の歌は、沈思の意味が薄れて眺望の意味に重点を移して行き、「ながむれば〜けり」という型は、「みわたせば〜けり」という型と同様に、発見的詠嘆のパターンとして近接し類似すること、また「秋の夕暮」の「かなし」く「さびし」く「あはれ」ぶかい風情を眺める歌が時代を追って熟成して行くことが指摘される。これらの考察を踏ま

えて、定家の当該歌を、〈発語者がある〈秋の夕〉の情景を「みわたす」ことによってある状況を見出し、そこに「かなし」く「さびし」く「あはれ」ぶかい風情を看取・発見した〉という構造を持つ歌として捉えることが可能となり、解釈が分裂してしかも整合性のあるものには到達できないとする立場と、本章のように、整合性のある解釈を求める立場とは、読みの前提条件を異にすることによっていずれも可能となり成立することが明らかにされる。「第五章 定家歌「春の夜の夢の浮橋」考—解釈の成立そして宇治十帖へ—」では、定家の「春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかる横雲の空」の歌について考察する。解釈や背景をめぐって議論が絶えないこの歌の構造を分析、視点と主体の問題を考察し、背景となる眺雲沈思のモチーフとの関連を論じ、多様な意味を生み続ける複雑な歌の仕組みそのものを解明する。「春の夜の夢の浮橋」における語句の掛り受け、「夢の浮橋」の意味として「浮橋」と「夢」のいずれかに力点が置かれること、語史的な背景として「橋—絶え」「夢—絶え」「雲—絶え」の三つの文脈があることを指摘し、また上の句と下の句との関係においても、「とだえして」が「橋」「夢」「雲」の三つとそれぞれ結び付き、切れ目にもなり結節点にもなっていて、幾筋にも分岐して行く複雑この上ない意味の流れがあり、しかもそれらがからまり合って茫漠たる風情を生み出し、視点あるいは動作の主体についても、登場人物の視点、客観的な第三者の視点、そして歌の中の各要素における視点の構成の仕方などを考慮すると、通常言われる解釈は、その中で一番単純鮮明なものを取り出したに過ぎないものであることが明らかにされる。眺雲沈思のモチーフを背景に置いて解釈されることが多いこの歌の情景や文脈を具体的かつ明瞭なものとするため、そして解釈を成立させるために、先行する当該モチーフ歌、文選・高唐賦、源氏物語などを呼び込み、その型にはめ込んだものとみなすことができること、宇治十帖との関連については、特定の場面と明瞭かつ直接的に結び付くのではなく、宇治十帖中にちりばめられた様々な印象的な語句との間に連想が働くことによって、薫をめぐる物語が一定の筋道を持って読者の脳裏に傍薄と浮かび上がり、おぼろげにイメージが揺曳するようになっていることを解明している論者の解釈は、物語の世界を和歌の世界に重ねて読ませようとする新古今時代の和歌の理解に資するところ少なくない。

新古今和歌集の基底となる事象や周辺的な問題に関する論考を収めた「第三部 新古今時代和歌の基底と周辺」をも加えた本論文は、提示された方法・理論にはなお補強すべき点もあり、また和歌の解釈についてもさらに多くの表現類型にそれを適用していく試みが期待されるものの、あるいは難解・解釈不能とされ、あるいは言語芸術表現・言説の多義性に収束させられることも多い新古今時代の和歌について、解釈の分かれが生じる回路と機構を明らかにし、その解釈に理論的根拠を提示しようとした意欲的な論であり、斯学の発展に寄与するところ少なくない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。